

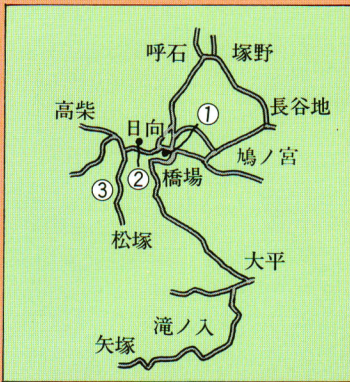
近世

豊臣秀吉の奥州仕置の後、関ヶ原合戦で豊臣側についた佐竹義宣が、慶長七年（一六〇二）出羽国秋田に移封されるまでその支配下におかれたのち、当地域をはじめとする南郷の地は幕府に収公され、幕府代官彦坂元正が慶長十一年まで支配した。これが、埴地方が幕府の直轄領となった最初である。

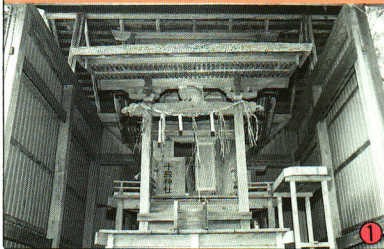
慶長八年、立花宗茂が、寺山館から二万石加増され赤館城主となり、元和六年（一六二〇）旧領筑後柳川に復した。当地域の村々は、近世初期から幕領として代官の支配するところと、棚倉藩によって支配される村とに分かれた。元和八年（一六二二）丹羽長重が常陸古渡から五万石で入封し、棚倉城の築城および城下町の整備がおこなわれ、当町域の旧村はすべてその支配下におかれた。寛永四年（一六二七）内藤信照が近江国より入封し、正保四年（一六四七）領内総検地が実施され、藩体制が確立された。内藤氏は、信照、信良、式信と三代七十八年にわたり支配し、宝永二年（一七〇五）駿河田中に移封するが、同地より太田資晴が入封し、享保十四年（一七二九）上野館林に所替えとなった時に、白川郡のうち六七ヶ村・二四、五九〇石余、その他常陸国多賀郡、陸奥国菊多郡・磐前郡などあわせて五万石余りが幕府に収公された。

初代の代官は岡田庄太夫で、古殿町竹貫に陣屋を開いたが、同年九月会田伊右衛門に代わった時、埴に代官所が開設された。上洪井、常世中野、下中塚、田野作、川下、川上の各村は天明四年（一七八四）に棚倉藩に支配替えされたが、埴、下洪井、竹之内、板庭、上中塚、木野反、台宿、伊香、植田、真名畑、上石井の各村は、幕末

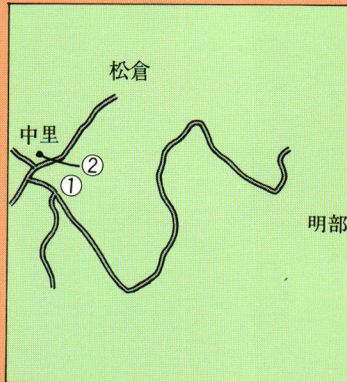
那倉



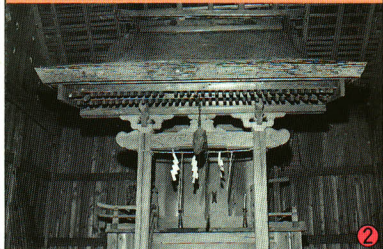
①十殿神社 ②熊野神社 ③雷神社



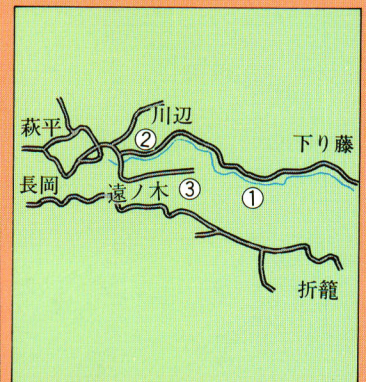
田代



①田代中里供養塔 ②北野神社



大蔵



①愛宕神社 ②金比羅神社 ③中村神社

